

## 学園都市って？(1) ちくほうま風 1号 (1993年6月5日)

「学園都市・飯塚」と言うけれど、どうも人によってズレがあるようだ。

\*\*\*\*

「学園都市なんて行政が言っているだけ」

「大学があるから松下の研究所や研究開発センターができた」

「バイト料は安いし遊ぶ所はないし、こんな街に来た学生はかわいそう」

「アパートはゴミで散らかされるしバイクはうるさいし…」

「筑豊ゼミで住民も育っているじゃないの」

「図書館が解放されたり、お散歩コースができて良くなったわね」

「学園都市にしようとか県も市も努力してるんや」

「行政は学園のほうばかり向いていて住民へのソフトの部分が遅れている」

\*\*\*\*

飯塚に近畿大学がきて二十六年「。今この筑豊の地で国際会議が開かれるまでに至った。田川にも待望の四年制・福岡県立大学ができた。大学が市民生活に密着すればするほど、改めて学園都市とは何かが問われてくる。人により立場により地域によって違う「学園都市」について様々な角度からアプローチしてみたい。

## 学園都市って？(2) ちくほうま風 2号 (1993年7月5日)

筑豊の大学の歴史を振り返ってみよう。

戦後間もない昭和24年、田川市に福岡学芸大学(後に教育大学)田川分校が設置された。戦前の福岡第2師範女子部が学制改革によって筑豊で最初の大学として生まれ変わったのである。

昭和42年の福岡教育大学赤間統合にともない田川分校は廃校となったが、市や住民の強い働きかけで福岡県立社会保育短期大学が設立された。それから25年後の平成4年、社会保育短大は4年生・福岡県立大学となり、社会福祉の拠点として現在に至る。

炭坑の賑わいを見せていた昭和32年、直方・山部に九州労田順三氏が、炭坑や公務員等働いている人に法律を学んでもらいたいと、法律専門の短期大学を創設した。当時の行実直方市長と懇意であった経緯で直方市に設立され、法学の権威であった宇賀田氏が学長に、行実市長が初代理事長に就任した。

その後昭和35年に西日本短期大学、42年に九州法科短期大学と改名。46年まで直方市で活動していた。

## 学園都市って？(3) ちくほうま風 3号 (1993年8月5日)

朝鮮動乱の終わりと共に、筑豊の炭坑景気は、陰りを見せ始め、ついに閉山となった。

閉山後の昭和40年前後、飯塚市では産炭地振興対策として、文化性を高めることにより活力をつけようとした。それは、大学誘致への取り組みとなっていた。

「国立科学技術大学」は豊橋市・長岡市に次ぐ三校目の立地を考えていた。飯塚市にと招聘の努力を始めた矢先、国策が変わり断念を強いられた。だが、飯塚市は諦めなかった。当時携わっていた某氏は、「休まずダウンせず諦めなかったのが良かった」と語っている。

方針を切り替え、ついに「国立九州工業大学情報工学部」の設立に成功した。昭和62年4月。実に20有余年に渡る長き道程であった。

一方、近畿大学の誘致は、昭和39年4月の飯塚市市議員岡部隆氏(近畿大学の前身、大阪理科大学卒)の世耕弘一総長訪問を端緒として、同年6月青山飯塚市長、浅野市議会議長が上阪して正式に近畿大学分校設置を要望した。同年8月世耕弘一総長が来飯して建設予定地を視察し、意欲的に準備を進めたが、校舎建築の遅れから40年の開校は見送られ、開学を待たずに40年4月27日逝去された。昭和41年4月、世耕正隆総長が初めて来飯され、工業化学科・電気工学科・建築学科3学科よりなる近畿大学第二工学部の開学式を迎えた。その後、昭和60年には、第二工学部から九州工学部に名称変更し、同62年産業デザイン学科・経営工学科を増設し5学科体制となった。(近畿大学の項は開設年次・学部名・学科名等、誤り多く全面的に書き換えました。後半部分のみ文責菊川)

## 学園都市って？(4) ちくほうま風 4号 (1993年9月5日)

直方の九州法科短大に話を戻す。九州法科短大は直方開校後、福岡と八女に西日本短期大学造園科等を新設したが文部省より統合の指示を受け、八女を西短付属高校とし、福岡・直方のみとなった。もともと労働大学として出発した九州法科短大は炭鉱閉山と共に学生数が減り、行実理事長の逝去に伴い、昭和47年北九州へ移転し再起を図る。

北九州法科短期大学として法律と経済をもって出発したが昭和53年やむなく休校となり現在に至っている。

ワイマール憲法研究の第一人者で、「筑豊を育てよう」という想いの強かった宇賀田順三学長の元には直方よりもむしろ飯塚や田川の学生のほうが多く集まったという。学生達は宇賀田教授の講義を受け、福岡市草ヶ江の自宅へ翌遊びに行ったそうだ。

直方市の街づくりを負う当時の行政マンや市民にとって九州法科短大はどのようなものであったのだろうか。周辺都市の学園都市構想が進む現在、ひとりの直方市民として「今にして思えば…」との口惜しい想いはひとしおである。その後の通産省による中小企業大学校ができたものの、「学生がいて研究者がいて、市民生活をも巻き込む教育研究機関」としての「学園」の意味合いは少ない。

## 学園都市って？(5) ちくほう玄風 5号 (1993年10月5日)

近畿大学九州工学部の学生数は増え続けた。S43年643人からS61年1188人、S62年産業デザイン・経営工学科の増設で1321人。現在、就学予定者数激減に備えて(?正しくは:第2次バブルと進学率の上昇に対応して)の特例により、大幅な定員増となり2061人が学ぶ学園となる。飯塚市の人口の約2.5%に値する。

1988年(S63年)近大九州工学部は地域に開かれる。「筑豊ムラおこし地域づくりゼミナール」の誕生である。ゼミ生は「筑豊ゼミの特色は、従来の公開講座と異なり、『地域に開かれた大学』を目指す近畿大学九州工学部が全面的に協力し、住民と大学との共催という形でゼミが運営されているというところである。単に大学の施設を開放し利用の便を図るだけでなく、教職員が、指導者・助言者・運営委員として多数参加しており大学と住民が手を携え『住学協同』を実践しており、まさに大学の頭脳を生かしながら“ふるさと浮揚策”を探るための実践活動になった。

筑豊ゼミは、筑豊の各地から行政の枠を超えて、多数の異業種・い分野の人々が集まり、「地域を良くしたいという共通の目標の下に努力している」と自負する。

## 学園都市って？(6) ちくほう玄風 6号 (1993年11月5日)

筑豊ゼミは、筑豊のあらゆる立場の人々が、「大学という中立的な立場」を通じて率直に語り合い、互いの考え方の違いを理解し「地域を題材にした新たな学習の機会」を得、「筑豊の新たなイメージ」づくりを形成することとなった。

それは個人および地域の利害を超え、多様な視点および広域的観点から筑豊の現状を認識し将来を展望する。即ち自らを知り自ら進むべき方向性を選択することが重要であると認識し、筑豊を改めて問い直して行く努力がなされた。

今まで知らなかった着眼点を知ることの楽しさや喜びを認識して行くそのことに、筑豊ゼミに多くの人が共感することになった。

I期・II期と筑豊全域からの受講生が「大学に集まり侃々諤々の討論を行い、各地に帰って多彩な活動を展開している。これは受講者の熱意とともに、大学は助言者を提供し、受講者が企画し自ら学びそれがそのまま地域の発展に深く関わるといった画期的な方式によるもの。これこそ大学と地域住民とが協同して行う生涯学習の一つの典型であると自負している。」と当時の近畿大学九州工学部長で筑豊ゼミ実行委員長・本郷英士先生の言葉である。(住学協同機構報告書参照)